

# 成蹊會誌

2001.7 No.93



専務理事通信  
文学部長に就任して

加藤 節……………2  
青野 暁子……………3

## 特別企画・特別寄稿

成蹊、思い出のあれこれ  
戦後日本の忘れ物  
文芸界昨今  
座談会／成蹊学園戦中戦後  
先輩の回顧談  
その三……………16  
清水 護……………4  
西原 春夫……………8  
田口 哲郎……………13

## 随想

何でもありの国、メキシコ  
沖縄より  
クラシックカメラ店開業始末  
愛すホッケーIN英国  
地方局女子アナ、6年目  
和やかな食卓  
表紙絵によせて／7 予告／12 第78回枯林忌／20  
新聞コラムより／21・31 あの人消息この人／21  
アルバム 私の先生／35 成蹊学園寮／53 ひと点描／54  
地域同窓会連絡先一覽／55  
成蹊会の活動に関するアンケート集計結果報告／56  
成蹊会ホームページ・Eメールアドレス／57 退職挨拶／58  
学術・教育研究助成報告／60 角川源義賞受賞／64

「成蹊の歌」正誤表／64  
成蹊高等学校(旧制)創立七十五周年記念事業報告／65  
成蹊学園の近況／68 学園史料館／74 図書館のご案内／76  
国際交流センター／77 四大学運動競技大会／78 物故会員／79  
惜別／79 寄付金芳名録／80 成蹊会事業報告／81  
叙勲／82 成蹊会報告／82

## 同窓のつどい

- 第24回桜祭……………32
- 北海道支部創立50周年……………34
- 観光成蹊会創立10周年……………36
- プレメの歴史をふり返って……………38
- 恩師を囲んで……………40
- 清忠F組クラス会 中村ゼミ「清和会」  
黒田道雄先生を囲む会 蹊デイスコース研究会  
星野先生喜寿祝賀会(星の子会)……………42
- 学校・年次会・ゼミOB会のつどい……………42
- 桃江会／政経学部第3回古稀の集い／  
文学部35周年／高校卒業40周年／  
小学校同窓会委員会／昭和26年大学入学者の集い／  
清水学級同窓会／大学卒業30周年／桜祭船越会／  
こぶし・山桜会／カウラ会30周年／やよい会親睦会……………48
- 体育会・文化会OB会……………48
- 大学軽音楽部OB会発足 大学ラグビー部OBの集い  
準硬式野球部OB総会 大学軟式庭球部創立50周年  
地域のつどい……………50
- ロンドン成蹊会……………50
- オーストラリア・クイーンズランド成蹊会……………50
- 秋田成蹊会 宮城成蹊会 渋谷成蹊会 三重成蹊会  
山口成蹊会 北九州成蹊会……………50

表紙の題字は故上條信山先生、絵は近藤和夫(旧高・23年)

# 文学部長に 就任して

お青の野 こう子 暁



平成十三年四月より、遠藤宏前文学部長の後を受けて、文学部長に就任いたしました。微力ではありますが、学部そのまま役として、またそれを通して大学及び学園のために、力を尽くしたいと思っておりますので、どうかよろしく願います。

文学部は、創設以来三学科でしたが、昨年三十五周年を迎え、従来の文学部を廃して、国際文化学科、現代

社会学科の二学科を設置し、また既存の英米文学科、日本文学科の二学科もカリキュラムの改定をおこなって、四学科体制で出発いたしました。

新しい文学部は、これまでより、広い領域を、研究・教育の対象とすることになりました。新二学科のうち、国際文化学科は、歴史研究、文化人類学、国際関係論などの方法によって、日本や世界の多様な文化の研究、文化間の比較や関係、あるいは文化の構造の解明などを目指し、また現代社会学科は、社会学とコミュニケーション研究の方法により、都市、地域社会、環境、福祉、情報、マスコミなど、現代社会さまざまな問題をとおして、個人と社会の関係、現代社会の構造や特質の解明を目指しています。また英米文学科と日本文学科では、言葉を通して人間を知ることを中心に、英語や日本語の表現・運用能力の養成の強化、言語や文学を、文化や社会の広いコンテクストのなかで、関連分野の知を使って考察することを目指しています。

文学という名のつく学科がアピールしにくい時代ですが、最近、文学研究も大きく変わりました。たとえば、アメリカ文学研究では、扱う対象も、いわゆる純文学的テクストから、イン

ディアン捕囚物語、奴隷体験記、説教集、大衆文学、SF、歴史・記録文書など、じつに多様になりました。また取り上げられるテーマを見ても、人種、性差、病氣、犯罪、医療、展覧会、市場、帝国主義などさまざままで、文化研究精神分析、脱構築、新歴史主義、フェミニズム、文化人類学などなどの理論を使って、時代・社会のイデオロギーが、それらのテーマを巡って、どのようテクストに表されているか、いなかを論じるものが多くなりました。たしかに文学は、最も個人的な表現ですが、まさにそれ故に時代・社会の力関係、価値観を意識的無意識的に表わしてもいます。最近では、文学研究と文化や歴史の研究との境界が必ずしも鮮明ではなくなってきたのです。

現在は、国や文化の境界を越えるグローバルな視野を持つことが必要であると言われますが、上に述べたような広い意味の文学研究は、そのための格好の媒体です。たとえば学生が人種差別について興味をもち、差別の歴史や、差別される者の悲惨さや怒り、差別する者の側の精神構造や抑圧、またいかに両者が、互いに相手のなかに自己のなかの恐怖や願望を投影しているかなどを、テクストをとおして学んで

いくなかで、これまでの自分の考えかた、生き方が差別的でなかったかの問いに必ず出会うことになります。そしてそのような自分との応答のなかで、差別と差異の違いを知り、他者は単なる好奇心の対象ではなくなり、自分とかわりのあるもの、自分のこれまで人間や世界の見方を変えるものになります。そして人種や性別や国家など、さまざまに交差する差異の境界線が、たとえ完全にはなくならないにしても、越え得るもの、可動なものであることを気づかせてくれるのだと思います。対立抗争と排他主義の目立つ現代こそ、広い意味での文学・文化研究が、もっと必要とされてもよいのではないかと考えています。

## 略 歴

昭和37年	お茶の水女子大学文教育学部英文科卒業
昭和41年	東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専攻修士課程修了
昭和41年	成蹊大学文学部講師
昭和47年	成蹊大学文学部助教授
昭和57年	成蹊大学文学部教授
平成13年	成蹊大学文学部長
専門分野	大学院文学研究科長 アメリカ文学



# 成蹊、思い出のあれこれ

清水 護



昭和十年の前後十数年にわたって、成蹊高校（旧制）の英語科は梅谷興一教授が中心であったと言えよう。梅谷氏は当時の英学者間であり知られていなかったが、英語の達人としては知る人ぞ知るで、稀に見る見事な英語を話し得る人であった。該博な知識を持ちながら、文章として英学界に残したものがほとんど見当たらないのは、まことに残念である。然し昭和十年前後に J O A K（今のNHKの前身）のラジオで、英語の講義（やや高度の）の放送しておられたことを思うと、やはりその道の異彩として認められておられたと思う。

昭和六年四月から同八年三月まで私は府立三中で英語教師の修業をしていたが、七年の第二期後半のある日、英語科主任の案内で外部からの参観者が見えた。私は五年のあるクラスで副

読本を講義中で、たまたまコロンブスが絶望に近い難航の末、漸く島影を発見、上陸するや、命拾いをした感謝をこめてその島を San Salvador と命名したというくだりであった。そこで、d と t はよく入れ替わるから、Salvator は英語の古語 Savior（「救い主」今は Savior が多く用いられる。salvation : save : safe : salve (sa : v) (癒) す (もの) など比較) に当たることを説明した。この時案内者が次のクラスへと誘ったが、来客は入口に立ったまま、なかなか動こうとされなかった。小柄ながら瀟洒たる英国風紳士という印象であった。

## 学園の玄関で

それから一、二週間たったころ、突然学校に電話がかかり、先日授業参観に伺った梅谷という者ですが……成蹊

高校へ迎えたいが、という内容であった。早速恩師の市河三喜先生をお訪ねすると事情が分かった。府立三中はやっとなれたところで離れたくなかったが、すすめられるまま指定の日にはじめて吉祥寺の学園を訪ねた。暫時英語科主任の梅谷先生と雑談のあと、それでは有名な浅野（孝之）校長をご紹介しよう、と校長室へ。

堂々たる体軀に悠揚迫らざる浅野校長には、おのずと抱擁力の豊かなことを感じさせるものがあった。先生は仏教主義の教育者として大正時代から令名が高かったことはあとで知ったが、この時、成蹊の教育について、行事には仏教色のものもある、とはおっしゃったが、仏教思想を強調することは、ひとことも聞かれなかった。ところが『回顧録 旧制成蹊高等学校』（39頁）を見ると「（浅野校長）は

欧米の教育がキリスト教を基盤とした筋金入りの教育であるのに反し、日本の教育では宗教的情操の薄いことを嘆き、熱意をもって生徒に対し仏教思想の注入をこころみた。教頭中島万次郎の退任に伴い、仏教研究の大家大峽秀栄を教頭に迎えたのも、こうした意図のもとになされたものである」とある。それとは知らず、では教頭の大峽先生から学内の詳しいことはお聞き下さい、と案内されるまま、筋金入りの法師が構えておられる教頭席の前へ出てご挨拶をした。やがて二人はゆっくり校内を歩きながら話し合ったが、いろいろ伺っている内に、この先生、本物のお坊さんじゃないかと思ひ、早目に了解を得た方が良からうと、私はキリスト教ですが、と宗旨の違いをお断りした。予期しておられたのか、先生は一層話が力がいって、学内行事その他の仏教的色彩のある面を強調された。二十分前後歩きながらの談話の中で、今も耳に残っているのは、こちらへいらっしてから具体的問題でお困りになることがいろいろ起りましようよ。ですから今のうちにお考え直しになつては……という思いがけないことばであった。

そこでこれだけはっきり言われた以

上、躊躇の余地なしと、お別れするやその足で市河先生をお訪ねし、その日のご報告に加えて、今回の件は勝手乍らご辞退すべきと存じますと申しあげた。先生は少しも動揺の色なく、宗教的雰囲気のある学校とない学校とでは、ある学校の方が却って良いのではないかね、という意味のことをおっしゃり、二、三日様子を見ることになった。そのあと関係者間でどういふ話し合いがあったかは知らないが、やがて校長は「そういう方は却って歓迎したい」意向であることが伝えられたので、一切のこだわりを捨てて、八年四月から国文の飛田隆先生とやはり国文の中村清一郎先生（あとで草田男さんと知った）といっしょに成蹊でお世話になることとなった。

## 「第二里を行く」(1) (2)

英語科での思い出にはいる前に、ひとこと中村春二先生の教育思想の一端に触れることをお許しください。『回顧録』第一章（2頁）によると「中村の思想的根源にはつねに東洋的、特に僧堂教育的また、曹洞宗的人間形成論があったため、意識的に西歐的教育を排除したともいえよう」とあるが、第六章「伝統の維持」の「成蹊

精神の宣揚」という段で、第一回生の神義之介氏は「先生は我々に『……万人みな義務として一里を行く時、己は第二里を行く人であらねばならぬ』と

もいはれた。……これこそ真の成蹊精神であろう」（46頁）と熱意をこめて書いておられる。この「第二里を行く」という発想は新約聖書マタイ伝五・四一「人もし汝に一里行くことを強ひなば、共に二里行け」（文語訳）から来ていると思う。ローマの支配下にあったユダヤでは市民は徴用の形で苦役（ここでは荷物運び）を強いられることがあったようで、そういう時、ぶつぶつ言わずに積極的にやっていたよ、という励ましのことばであったように思われる。ウェブスターの『新国際大英辞典第三版』は、second mile」という単独の見出しで上記のマタイ伝の聖句に相当する英訳聖書の訳文（改定標準訳）を引き、これは“go the second mile”とこう成句と「a deed of charity or kindness beyond the demands of duty」の意味で使われる」と説明している。こうして見ると、中村先生の教育思想の中にはキリスト教的要素も吸収されていると言い得るのではなからうか。

## 英語科点描（梅谷・須藤両先生）

さて、当時英語科の教授陣の主力は、外語出身で、戦前英語教育界で高検（高等学校英語科教員の資格試験）というたいへんむずかしい試験の合格者揃いであったが、単なる大学卒も混えては、との考慮から、主任の梅谷先生が市河先生を訪ねられ、採否は実際の授業を見た上で学校側に任せるという了解で、数人の候補者を挙げていただき、それぞれの勤務校へ足を運ばれたという。上記府立三中への英語授業参観行はその一環であったとは、あとで知った次第である。英語科はじつに自由で、学年初めに担当クラスと教材がきまれば、あとは主任への連絡など何一つしなくても差し支えなかった。その反面、特別のことが無い限り、相互間の接触は比較的少なかった様に思う。

第一、梅谷先生であるが、ご履歴その他について資料が極めて少ないことはさきにひとこと触れた通りである。ところが、多年同じ成蹊学園の高校で教え、大学の講師をしておられる高橋俊昭氏は、かねて日本の英語史関係の研究を手がけられ、日本英学史研究会（後に学会）の幹事をしておられた関

係で、偶然同学会の古い研究会の「研究報告」第91号に「明治の英学（5）梅谷興一」という講演（但し原稿なしであったという）の記録とも言つべき印刷物（手書きの謄写版刷）を発見され、そのコピーをいただいた。表紙（活字印刷）には「一九六八・四・一三（例会席上）於京都同志社大会」とある。講演者はこのとき八十二才で、武蔵野女子大学教授として活躍しておられたことになるが、ご自分で語られたこの回顧談（僅か二千五百字前後の短いもの）により、先生は外語から東大の英文科（選科）に進まれ、夏目（金之助）先生、上田敏先生……、ロレンス先生（市河・斎藤勇両博士の恩師）（「他の東大生は余りしゃべらないので私がよくお相手をした……」）等の講義を聞かれ、卒論は「小説の起源」であったとのこと。また先生の中学時代からどういふ本が読まれ、又どういふ風にしてあれだけの英語力が身につくまで努力されたか、などおぼろげながら推察できて興味深く、貴重な資料である。

英語科の先生方の中ではほかにとくに印象に残っておられるのは須藤参治先生である。いつも黙々と机に向かつて読書しておられたが、時折談話の中

に混じって聞かれる英語の素晴らしいこと、常々感服していた。昭和十一年五月三十日には第八回日本英文学会が仙台で開催されるというので、私はその頃興味を持っていた旧約聖書の固有名詞の意味についてこの学会で発表しようとして準備をし講演用のハンドアウト（タイプ印書で三枚）を、自己紹介をかね、ご挨拶のつもりでおそろのおそろ先生に差し上げた。内容の性質から、ところどころに旧約の原語が出てくる。先生はすらすらとご覧になって、いきなりヘブライ語では湯浅半月という大家がいましたね。かくかくの長い物語詩をヘブライ語で書いて……とびりくりする様な話を淡々となさる。さらに仙台といえば二高には栗野健次郎（注。若くして一高の英語教授。やがて二高へ転任）という名物教授がいますね。朝からチビリチビリとお酒を飲んでじっと読書を楽しみ、珍しい博識だったが一向に書かないんで有名でして……と。この話二つとも本当であることを確認し、もっといろいろ教えていただければ良かったにと、残念に思っている。

手塚・大久保先生など

博識で書かない人と言えば職員室で

すぐ近くに坐っておられた教務課長の手塚宏寿先生もそうであった。上記大映先生は間もなく教頭を退かれ、先生が先生が教頭を兼ねられたが、先生のご専攻は漢文と聞いていたので、自分としてはある種の先人主を抱いていた。ところがある日、職員室の一隅で、天気ヨ報のヨと、ヨ言者のヨとは違う。前者は「あらかじめ」のヨで、後者は「あずかる」の「預」即ち「神のコトバを預る者」の意であると、手塚先生が熱弁を振るっておられる。漢学の先生にしてこんな話題をまじめに取り上げられるのは全く意外で、この時手塚先生が内村鑑三先生の講筵に列する経験をお持ちではないかと、勝手な想像をした。

ずっと不思議に思っていた方のお一人に大久保捨蔵先生がおられる。元来体育の先生と伺ったが、一時ラグビー部の部長もしておられたので、同部関係の卒業生の間では先生に関する逸話はいくつも秘蔵されている筈である。一旦何人かの職員と共に退職されたが、再び囑託として生徒の指導にあたられたと記憶する。全く俗人の域を脱して超人的なところがあり、鍛えあげた軀は小柄ながら見るからに強靱であった。学園の北西の一隅に、文字通

りの草庵を居として、書道、茶道をたしなみ、仙人の面影さえしのべられた。この草庵には一度だけ伺ったことがある。床の間には数羽の雀がかまびすしくさえずり合いながら飛び交っている額縁がある。賛を見て、これは雀の親子の子離れ、親離れの（？鳴き別れの）場面であることを知った。自然のおきては人間界よりもっと峻厳であることを思い、しばしその前にたたずんだ。

この絵の隣には「人はパンのみにて生くるものに非ず」という掛け軸が一幅かかっていた。はあ、大久保先生もか、とこれまでの迂闊さを恥じた次第である。

図書館の三浦経太氏も忘れ得ぬ学園の主のお一人であった。退職後再び囑託としてお手伝いいただいたが、私としてはもっといろいろなことを伺っておけば良かったと、悔やまれる。亡くなれてからもご命日には墓参をかかさぬ事務職員のおられたことが思い出される。ちなみに、高校長の横地孝氏は同氏の令孫の由である。

汗と鳩

土に親しむ「作業」の時間は成蹊教育の特色の一つであった。夏期休暇中

く、須藤先生などと並んで、英語科の最長老教授であられたにも不拘、戦後のこの企画にご協力いただいたことを深く感謝する。

なお、本稿の印刷進行中に、この英語科編の記念出版が「学園資料館」に保存されていることが判明したのでいつでもご覧いただけることを付記します。

元成蹊高等学校(旧制)校長(特別会員)

略歴

生年月日	明治41年10月30日
昭和6年3月	東京大学文学部卒業
同 9月	東京府立第三中学校教諭
昭和8年4月	旧制成蹊高等学校教諭 兼教授
昭和21年8月	同校長兼教授
昭和23年3月	同校長辞任
昭和24年4月	成蹊大学教授(英語科 主任)
昭和31年4月	国際基督教大学教授
昭和32年9月	米國ハーバード大学留学
33年10月	(フルブライト研究員)
現在	(勸英語教育協議会 (IEEC) 理事長



表紙絵によせて

には広い構内の荒地が好個の修練場となり、時には深い竹藪を四一五尺も掘り起こして根を取除く大作業もやっただ。この時は浅野校長自ら先頭に立って汗だくになられる。従って各科の先生がそれぞれ体力相応に鎌・鍬を振った。大久保先生のほかに作業専門の三上和先生(比較的早く退職)などに混じって梅地慎三先生(専門は数学)も印象的実践家であった。梅地先生は「メダカ庵」の主として学生に親しまれた風流人であったと言えようか。ある夏の作業中の昼食後の休憩時間であった。幾人かの先生方、その中に中村清一郎先生も、が木かげに腰をおろしておられるところへ梅地先生が汗のまま伝書鳩をかかえて来られ、いつも夢見ておられる様な草田男先生に、鳩につけて飛ばしますので何か一句お願いします、と用意の紙筆を差し出した。すると先生は、「あ、そうですか」と、何の躊躇もなく

とび立つ鳩の 便りかな  
とすらすらと認めて渡された。滅多に見られぬ光景ではなからうか。

学園英語科編の記念出版

時は流れて新制中学・高校・大学と

陽春の休日、久しぶりに学園を訪れた。懐かしい風景が随所に残っているが、一枚の絵ともなれば、やはり正門からの景色が最も成蹊を象徴しているように思えて、スケッチブックを拡げることにした。

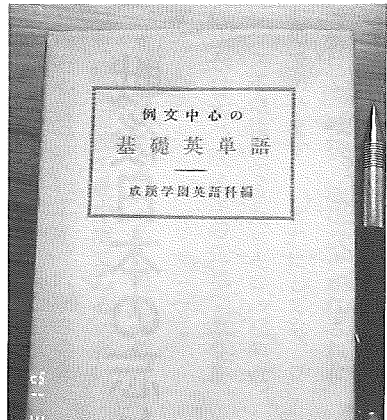
枝をいっぱい伸ばして大きく育った樺並木の奥には、昔のままの本館が依然として健在である。私は昭和十年小学校に入学して以来、旧制高校卒業までの十三年間をこの学園で学び、そして遊んだ。

戦前から戦中戦後にかけて、幼い時からおとなになる直前までの多感な年月を過ごさせていただいたことは、そのまま人格形成に直結する。

当時の成蹊は少人数の一貫教育で、私達在学习中は、机の大小、椅子の高低はあっても、常に本館内のごとくに自分達の教室が存在した。今では考えも及ばぬことだが、それだけ家族的であった。

半世紀前の往時を懐かしみ、敬愛と感謝の意を込めて、なんとか油絵を描き上げた。

近藤和夫(旧高・23年)



なった。当時の記録を読むと「学園英語科の連絡会」があったらしい。この会の席で「中学校として三年間にぜひ学習させたい語彙がきまれば、どんなにか好都合であろう」という意見が出た。これが紆余曲折を経て、ついに学校から予算をもらい、昭和29年の夏休みを期して当時行われていた英語教科書約十種を調査して語彙選定の作業を進めることになった。

この企画にはほとんど全学園の英語科関係者(非常勤の講師まで)が協力し、ついに昭和31年4月5日付で『例文中心の基礎英単語 成蹊学園英語科編 研究社』(四六版。本文二五三頁)が完成した。しかし不覚にも編纂者代表の私自身の手許にも実物が無いので先日研究社へ赴いて厳重に保存さ

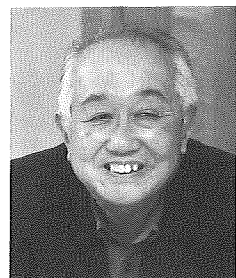
れている原本を確認し、必要部分をコピーしてもらった。この時出版社の現在の編集担当者は、「これは今も使えますね」と感想をもらされた。その「はしがき」を見ると若い先生方の協力ぶりが目の前に浮かび上がる。一部をここに記して感謝のしるしとしたい。

原稿カード執筆

- 芦川長三郎(S後半)
- 永岡 定夫(DO)
- 藤井 一美(HJ)
- 中島 和(C)
- 福与 正治(B)
- 二瓶 重直(IR)
- 羽深 幸男(EG)
- 清水 恒子(W)
- 林 俊一(LN)
- 和田 直子(KPQTVYZ)
- 川合友次郎(AU)
- 若林 秀善(F)
- 前川 祐一(S前半)
- 横手 長治(M)
- 補修・校正 広瀬 三男
- 小松原茂雄
- 内容総合調査 島田ちえ子
- 文型表 寺尾豊太郎
- ここにお名前のある川合先生は、刈部栄吉先生(白寿を越えられたと聞

# 文芸界昨今

たぐちてつお  
田口哲郎



本文は平成13年3月13日  
開催の成蹊小学校同窓会  
委員会（於ニユール・ト  
キョーラ・ステラ）でも  
キヨウレタ講演を抄録した  
のです。

## ▽失われなかった伝統

貴重なお時間を申しわけないようですが、思い出すままにおしゃべりをすることにいたします。

私は小学校入学から高校までちょうど十二年成蹊におりまして、いま六十を過ぎ、そろそろ七十に近くなつてまいりますと、私のかなり大きな部分はやはり成蹊ということをししばしば感じます。

昨年でしたか、朝日新聞から言われました、『街物語』という小説を書きました。何か自分とかかわりの深い街を背景にして物語をつくってくれという注文によって書いたものです。

私は、成蹊を卒業してからあちこち何カ所も住んでおりました。

しかし、いざ、街物語、何か街を主題にして小説を書くようにと言われま

すと、やはり戻ってくるのは吉祥寺の街なんですわ。

私が小学校へ通っていたころの家は、東京女子大のすぐ脇にありまして、善福寺池の近くです。学校まで徒歩で三十分ぐらいかかりました。

毎日、毎日三十分、登校の時は隊伍を組んで女子大から成蹊まで、その辺の生徒たちと一緒に歩いていった覚えがあります。

そういう感覚はもう身にしみついていくわけです。書こうとすればそういうものしかないと思ひまして。ちょうど一昨年の大晦日に小説を書くために、もう一度、女子大からものバス通りを通して、成蹊の東門まで歩いていったことがあります。成蹊の校内に、いま行ってみますと、後ろのほうは随分変わりましたけれども、本館と、昔、理化館といった建物、いま何

といえますかね……。 (大学一号館という声あり) 大学一号館ですか。あのあたり風景は全く変わっていない。古

びたレンガの三階建ての建物があった、その左手のほうに中村春二先生の胸像がある。右手のほうにはヒマラヤ杉が一本、大きいのが立っています。そこだけは時間が止まっているような感じがありました。ずっと校内を抜けて、裏の……今は中学校、高校でしょ

うか、あちらのほうまで行って見ましたけれども、報命神社の跡もどうなっているかと思つたらもう跡形もありませんでした。

そういう中をうろつき回った挙げ句、ちょうど本館の見える前庭にベンチがありましたので、底冷えのする日でしたけれども、三十分ぐらいそこに座っているんなことを思い返していました。それで『街物語』という作品が

できたわけです。

もう一つ、私にとって非常に大きなことは、小学校時代を戦争の中で過ごしたことです。私は昭和二十年四月が卒業ですから、戦争の時期をまるまる成蹊小学生として過ごしたと言つていいように思います。

今から考えてみますと、成蹊は、いろいろな意味でその当時の一般の学校とは違つていたみたいですが。成蹊は坊ちゃん学校なんていわれて、いまだに私が成蹊というところ、「おまえは坊ちゃん学校出身か、それでも」なんて言われます。それは、もちろん冷やかしの言葉にすぎないけれども、その当時の軍国的教育と一線を画した教育が成蹊にあつたことは確かです。

特に平和教育をやったとか、そんなことではないんです。時勢に沿ったカリキュラムが組まれていたことには違いないけれども、その運用とか、もう少し広い意味の精神的な意味で、校風であるとか、そういうものはあの戦争の時代にも、昔、中村春二先生の時代からの伝統が失われていなくなつたと思ひます。西尾幹二という評論家がおりますね。今から三年位前でしたか、彼と教育について対談をやつたことがあります。互いの小学校時代の経験

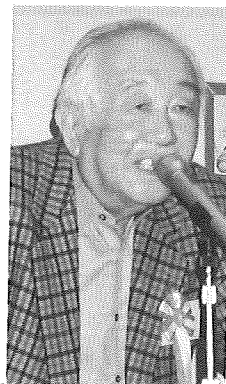
を語ると雰囲気というか、あり方というか、そういうものが全然違っている。そして西尾は、「成蹊」というのは戦時中でも理想郷だったんだなあ」とうらやむような声を上げておりました。

我々は少なくとも体罰というのは与えられたことはなかったんです。鉄拳制裁は一般の学校では当たり前だったらしいけれども、そういうものは我々は全く知らずに済んだのです。

私は今でも暴力というのはいやです。身の毛のよだつほどいやです。暴力のかかわることに類することや何かには、絶対に関わるまいと思っっています。それはあの成蹊の雰囲気の中から自然に身についてきたことではなかったかなと思います。

▽奉安殿のない学校

もう一つ、成蹊の学校の特徴を象徴的にあらわすのは、学校に奉安殿がなかったですね。御真影を納めておく奉安殿というのがどこの学校にもあっ



て、それは大体校門のすぐ脇のところにあって、学校に出入りするには必ずその前で最敬礼をしなければいけなかったのですが、成蹊にはその奉安殿がなかった。

御真影はもちろんありません。式の時には御真影を飾って、それに拝礼することはありましたけれども、あれは一体どこにしまわれていたんでしょうね。校長室か何かにあっただけでしょう。それが出てくるだけで、毎日、その奉安殿の前に最敬礼をして登下校をするという経験はしないで済んだ。

これは、小さなことのように思いますが、学校の特徴をあらわしていることであって、そういうことも私の原体験として生きています。

▽集団疎開の思い出

それから、一番大きな我々の出来事といったら戦争中の集団疎開です。

昭和十九年に学童の疎開令が出まして、二カ月から三カ月の準備期間で学童疎開というのは実行されているわけです。あのころの資料が今発掘されておりました、私もいろいろ調べたりもしましたけれども、実にあわただしく行われている。成蹊の場合は第一陣が行ったのが昭和十九年九月だったと思

います。行き先は箱根の寮です。

第一次に行ったのは全体の三分の二ぐらいでしょうか。はっきり細かい数字はわかりませんが、そのうちの者が第一陣として行った。そのあと、三分の一の者が残ったわけです。

私も残留を認めてもらっていたんですけども、それも半年ぐらいで、昭和二十年に入りますと、残留はもう許されなくなってしまう。それで、埼玉県の南埼玉郡栢間村というところ——東北線の桶川の駅から我々は歩いて行った覚えがあります。一時間ぐらいかかったような気がしますが、初めて行くところで心細いから、恐らく遠く思ったんでしょうね。小学校の四年、五年、六年生が正法院というお寺の本堂に寝起きしました。このお寺でそんなにひどい苦勞をしたわけではありません。というのは、第一、期間が短かったですね。昭和二十年一月の二十日頃から小学校を卒業する三月二十日ぐらいまでですから、わずか二カ月足らずの期間にすぎなかった。まだそのころは埼玉県の田舎には食料があつて、ひもじい思いをしなかったわけではないけれども、よく学童疎開で聞きます。どこかに盗みに入ったとか、畑のものを掘り出して食べたとか、そう

いうことはなくて、半分は合宿気分です。過ごすことができたと思います。どうも箱根のほうが食料は厳しかったみたいですね。

疎開の記録というものはいろいろ書かれていて、ひもじかったこと、孤独であったことが主題の文章がよく書かれます。それも確かにそのとおりだけれども、私は、疎開体験の一番大きいことは、その人間の素顔が見えてくるということだと思います。学校に家から通っている間は、学校の先生は先生という役割、我々は生徒という役割を果たしていればいいわけだけれども、二六時中、起居をともにすることになると、相手のそれぞれの人間性というのがもろに見えてきてしまう。先生もまた我々と同じ人間なんだということ、頭でなくて肌身に染みて理解させられる。

先生というのは立派なタテマエを言うけれども、必ずしもそうでないところがいろいろ見えてくるわけです。疎開先で非常に信望を得た先生もおられたし、名前は挙げませんが、はなはだ芳しくない先生もおられた。わずか二カ月の間にそういうことが見えてきてしまった。

だから、もっと長く疎開をしていな

ければならなかった場合は、修羅場になったところが多いですね。先生が先生でなくなってしまうと、ただの権力的な大人にすぎないということが見えてくる。人間のタテマエなんてものは平和な時に保たれているだけのもので、一朝事があれば、簡単に崩れてしまふものなんだということが、はっきり認識されたり、自覚されてはいないにしても、後年の人間観に影響しているように思います。

私は、昭和四十三年に疎開を背景に『少年たちの戦場』という小説を書きました。これは、栢間という実名は全く出てきませんが、それがはっきりわかるように書きまして、終戦まで主人公はそこにいたという設定で書きました。その時も、栢間まで出かけていた。その時、正法院のお寺の周り、裏に古い古墳がありまして、そこが我々の遊び場だったのですが、そのあたりを廻って記憶を甦らせてから小説を書き上げたわけです。

その時書きたかったのは、早くして人間とか社会の実相を知ってしまった子供たちの姿でした。疎開学童たちの現在まで物語に組み入れたので先生のところには何度か伺っているいろいろお話を聞いたり、当時のクラスメートの

書いていた日記を参考に借してもらい、だいぶ助かった覚えがあります。

栢間村での忘れられないのは、三月十日です。夜中に空襲があり、東京が焼けているという声の村の人たちから伝わってきました。お寺のそばに川が流れていて、そこに小さな橋がかかっている。そのほとりところまで出かけていくと、東京のほうの空が真っ赤に燃えているのが見えました。

あの空襲は下町を中心とする空襲でしたから、我々の暮らしている場所とはちょっと距離が離れていたわけですが、そんなことはわからない。一体あの炎の下がどうなっているのか、自分の家は一体どうなってしまったのか。そういう不安感、周りの者が全部滅びてしまうという感覚というのは、我々の人生の中で初めてだったに違いない。そういう体験が私の戦争認識の土台になっているように思います。

私が小説を書くようになったのは、そういう戦争の体験がバネになっています。それを成蹊的な環境の中で知っていたということが、随分大きかったように思います。

▽戦争と人間と文学

昭和二十年八月十五日、それ以来も

う五十数年平和が続いています。それはありがたいこと、うれしいことではあるわけけれども、一体それが文学にとってどうかということになると、また別の問題が起ってくるように思います。

戦場体験のある戦後派のある小説家が、「戦争がなくなると文学はどくなるのか」と言ったことがありますが、戦争は殺し合いであって、無益な悲惨なものだ。このことは確かに違いないにしても、同時に、戦争は国家を挙げての営みであって、そこに人間の総力を使つての努力がいろいろな形であらわれてくるものでもあります。その中に記憶に残るような崇高な行為もあった。残虐もなくなり、崇高もなくあり、平らになってしまったのがこの五十年の平和だ、というふうに言ってしまうたら言い過ぎかもしれないけれども、国家の総力を挙げての営みの中で、人間が生きていくという体験を得られなかったことは、小説の世界に随分影響しているように思います。

最近、文学の不振ということがしきりに言われておりましたが、小説が読まれなくなった。「人生とは何か」という野暮ったい主題は、文学の底流にずっとあるものですが、そんな

ことを考えなくても生きていけるような時代は、なかなか文学を育てないということがどうもありません。文学には「不幸が生み出した事実」という側面が避けがたくあるのです。文学なんか滅びた方がいいんだという議論はもちろんあるでしょうけれども、私なんかは、戦争中に得られたものを基礎にして、人間というものを文学を通して考えていきたい、そんなふうには思っています。

どうもとりとめもない話で申しわけありませんけれども、この辺で失礼します。 筆名 高井有一(高・26年)

略歴
生年月日 昭和7年4月27日
出身 東京都
学歴
昭和20年3月 成蹊小学校卒業
昭和26年3月 成蹊高校卒業
昭和30年3月 早稲田大学英文科卒業
経歴
昭和30～50年 社団法人共同通信社 在籍
昭和41年1月 小説「北の河」にて 芥川賞受賞
作品はほかに 「夜の蟻」「高らかな挽歌」など
現在
日本芸術院会員
日本文芸家協会理事長